

## 言葉を発し、到来する主なる神

エルサレム神殿聖歌隊の指揮者アサフの歌。最初の行は、「エル、エロヒーム、ヤハウエ」であり、神々の神である「主」（ヤハウエ）が主語として登場する。まず、この詩をできたら朗読しよう。力強い神である主は、行動する神である。彼は「語り」、地を「呼び集める」（1 節）。私たちの神は到来する神として顕現され、沈黙しない。（2 節）彼は呼びかけ、彼の民を審く（4 節）。神は自己宣言される「わたしは神、わたしはお前の神」。私たちは自分でこの世を裁く必要はない。神を神とすることで人は自由にされるのである。この神に対して、信仰者たちは「慈しみに生きる者」「いけにえを供えて契約を結んだ者」と呼ばれている。このお方をすべてに勝るお方として神とすること！この方を礼拝し、祈り、賛美することが第一であり、救い出された者として、社会的正義に生きることがそれに続く信仰者の課題である。

### 1. 全世界は神のものである！

契約を結ぶ民は犠牲を捧げる。しかし、神は人間から犠牲を求めない。犠牲を捧げる「その人」を求めておられる。全世界は神のものである！神が何かを欲しがり、人が神をなだめることなど必要がない。「森の生き物」「山々に群がる獣」「山々の鳥」「世界とそこに満ちているもの」はすべて神のものだからである。壮大な讃美である！麗しきシオンに座して裁く神のイメージであるが、それが神話的に宇宙的に拡大され、「麗しさの極みシオン」と言われている。単なるシオニズム＝エルサレム中心主義のようなものではない。神は全宇宙を法廷とし、天を証人として地を裁かれる！特に愛された彼の民を裁かれる。5 節で「わたしの慈しみに生きる者」（*hāsīday* ハシデーム）を呼び出すと言う。外見的に敬虔に見えても神を侮る「背く者」（16 節）を召喚する。

### 2. 真の捧げもの

神は人間から犠牲を求めない、神は人間に依存しないと言っても、神の恵み、恵みの神への感謝の捧げものを捧げなくてよいということにはならぬだろう。神は、神に呼びかけるように人に勧め、神は私たちを救おうと待っておられると歌っている。そして祈りと感謝、賛美＝「告白」（14 節、23 節）こそ、真の捧げものなのである。このような応答によって、私たちは神に栄光を帰することができる。

### 3. 道徳的、倫理的行動

求められているのは犠牲を捧げて神を礼拝することだけではない。（1）盗人と結託すること、（2）姦淫を行う者（偶像礼拝と性的不道徳の仲間者になることを禁じているが、今日、性的志向性には多様性があるので、性的言語、性的決めつけに注意せよ！）（3）悪事、欺きを口にすること、偽証（4）兄弟姉妹をそしめること、を避けることが求められている。個人的欠陥や弱さの問題より社会的関係性の課題である。外見的・祭儀的礼拝行為と道徳的・倫理的行為の間に齟齬があってはならない。両者は深く関連している。

### 4. 神の審判を恐れよ

神は人ではないので、誤魔化し、嘘、偽りは通用しない。人は騙せても神を騙すことはできない。

神を自分たち人と同じようなものと看做してはならない。神は黙しておらず、その人の行為と心に従って審かれる。神の手から逃れられる者は誰もいない。神の手から「救いだせる者はいない」(22節)。神の忍耐と「寛容」を神の不在、神の沈黙と勘違いしないように。脅かされた神の義は神自らが護るであろう。神と神とするとき、人はあらゆる偶像礼拝から解放され、自由にされる。

#### 5. 道を正す人に、救いを示そう

「自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にはありません。自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださる」(Iヨハネ1:8-9)。この暗唱聖句によって救われた想いであった。「神は真実で正しいお方である」！ここに救いがある。「正しい道を逝く人たちにわたしは神の救いを示すであろう」。神殿における司式者が語ったものであろうか？神の言葉は礼拝の司式者と一体となって語っている(16節~23節)「私は示すであろう、私の救い」をと言うのが文法的に正しいのであろうが、「神の救い」(bēyēsa'(ヤーシャー) ʾēlohīm)となっている。神ご自身が語られると理解すれば、「神々しい」救いとも考えられるだろう。「告白をいけにえとする」(23節)。「賛美という捧げもの」とは素敵な言葉である。「道を正す人に神の救いを示そう」(wāsām derek=道あるいは行為を真っすぐ立たせるその人たちに、あるいは道を真っすぐに行く人たちに) 'ar'ennū(Hiph. fut.I will show) 神は救いを示されるという約束である。